資料 3－2

OIST 外部評価（2019.11.6 – 11.8）陪席所感

内閣府 OIST 検討会座長　相　澤　益　男　2020.1.28

- 今回の外部評価委員会は、相澤益男内閣府 OIST 検討会座長と Cherry Murray OIST 理事会議長に公開のもとで開催された。透明性が確保されたのではないか。

- 外部評価委員会の構成は、Olaf Kuebler 元 ETH 学長を委員長とし、ノーベル賞受賞者、国際的なリーディング大学・研究機関の学長経験者等であり、世界トップレベルの研究大学を目指す OIST 外部評価に相応しいと認識。

- 外部評価の目的は、前回の外部評価後の進捗評価、OIST2020-2030 戦略プランの評価という二本立て。

- 陪席者に公開となったのは、Gruss 学長による OIST Overview、OIST からのプレゼン、ラボツアー、Kuebler 委員長による Panel Feedback。評価委員による討議は非公開。Report の骨格は Panel Feedback でまとめられた。

- Gruss 学長は、Nature Index で世界９位、国内１位にランクインしたことが、創設以来の研究成果の象徴であると強調。一方、世界トップレベル研究大学の実現における High Trust Funding の重要性を主張。自助努力としては、外部資金獲得、OIST Foundation の設置を挙げた。

- Panel Feedback では、研究・教育の目覚ましい進捗を評価しつつも、さらに踏み込んだ評価は示されなかった。むしろ、世界トップレベルを目指すには、Critical Mass をはるかに下回っており、特に、データサイエンスに代表される新領域の拡充が喫緊の課題であると指摘された。

- 前回外部評価以後の進捗については、個別研究評価が行われるのではないかと期待されたところである。しかし、公開討議では、OIST2020-2030 戦略プランをどう実質化するかに重点があったように思う。世界トップレベル大学・研究機関を牽引してきた評価委員の熱い思いと期待が、OIST に寄せられたとの印象を受けた。